

不登校の多様化と早期対応

鳥取大学大学院医学系研究科臨床心理学講座 井上 雅彦

1 不登校の推移とその実態

全体的な少子化傾向にもかかわらず、文科省の調査によると不登校児童生徒の数はいったん下降傾向を示してはいたが最近では再び増加傾向を示している。さらに「中1ギャップ」と呼ばれる中学1年時に激増する現象についても変化はない。また不登校のきっかけとなる事柄については「その他本人に関わる問題」、つまり「極度の不安や緊張、無気力等で特に直接のきっかけとなるような事柄がみあたらないもの」が学校種を問わず第1位を占めている。継続要因についても「無気力」（無気力でなんとなく登校しない、登校しないことへの罪悪感が少なく、迎えにいったり強く催促すると登校するが長続きしない）が小中高とも3割を占め、「不安など情緒的混乱」（登校の意志はあるが身体の不調を訴え登校できない、漠然とした不安を訴え登校しないなど、不安を中心とした情緒的な混乱によって登校しない／できない）が小学校で約4割、中学校で約3割、高校で約2割を示している。これらの調査結果から、最近の不登校の要因や状態像としては、きっかけ・継続要因ともに似通っており、「直接のきっかけははっきりせず、無気力で漠然とした不安を持ち、時として情緒的混乱をきたす」という実態が浮かび上がってくる。

また文科省の平成18年度のデータによれば、指導の結果、登校可能となった児童生徒は小学校32.6%、中学校29.9%であり、継続登校は不可能だが改善がみられたという事例を含めれば小中学校とも約半数の子どもたちが指導の結果改善を示すことが示されている。

高校1年の不登校生徒の約3割が中3からの継続であり、高校の不登校生徒約5万7千名のうち約半数が結果的に原級留置や中途退学に追い込まれていることを考えてみても不登校の予後は決して楽観的なものではなく、積極的な対応が必要とされる。

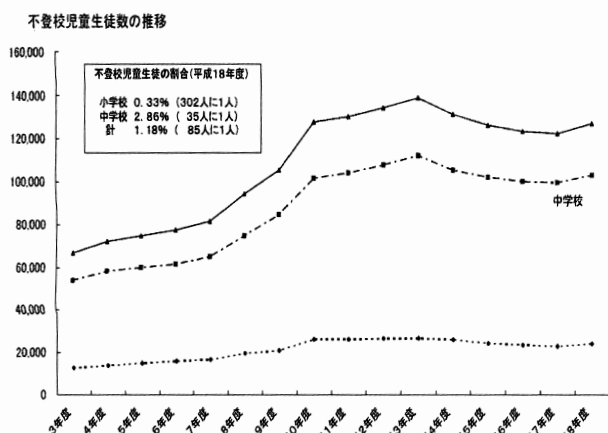


図1 不登校児童生徒数の推移

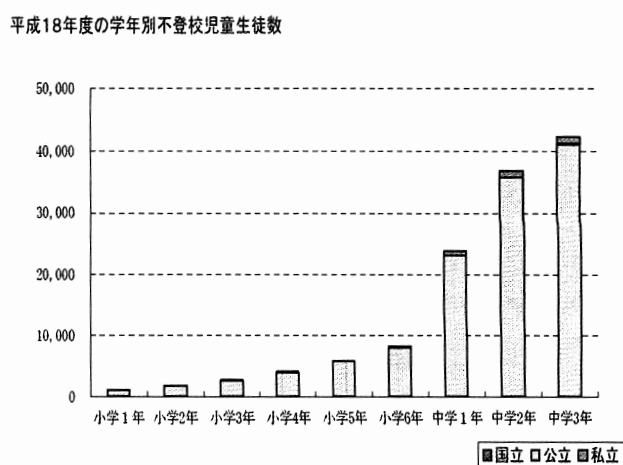


図2 学年別不登校児童生徒数

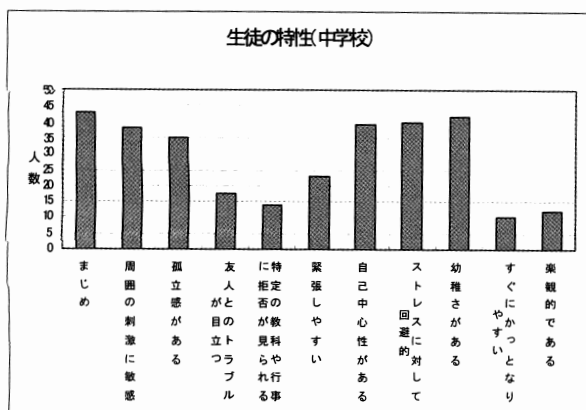


図3 明石市の不登校生徒の特性

	小学校	中学校	高等学校
1	その他本人に関わる問題 37.8%	その他本人に関わる問題 36.2%	その他本人に関わる問題 34.6%
2	親子関係をめぐる問題 17.8%	いじめを除く友人関係をめぐる問題 19.7%	学業の不振 13.9%
3	いじめを除く友人関係をめぐる問題 12.2%	学業の不振 9.8%	いじめを除く友人関係をめぐる問題 13.1%
4	家庭の生活環境の急激な変化 9.7%	親子関係をめぐる問題 9.3%	入学、転編入学、進級時の不適応 8.5%
5	病気による欠席 8.8%	病気による欠席 7.2%	病気による欠席 8.2%

図4 不登校のきっかけ(全国)

2 対応の原則

「登校を促すことは慎むべきで、エネルギーがたまるまで休ませればいけるようになる」という根拠のない消極的な対応や「引っ張ってでも連れて行く」という極端な強制的対応という両極論では、今の不登校の状態像や要因からは、現状にはそぐわないことは明らかである。

1) 個々の児童生徒の実態把握

あたり前のことであるが、多くの担任の先生方にお聞きしても「細かい実態はわかりません」とおっしゃられることが多く、個々の子どもの情報はおおざっぱでかつ文書化されていない傾向がある。図3にも見られるように個々の状態は複雑化し、表面的には実態が見えにくくなっていることを考えると、より積極的な実態把握が必要である。また個々に合わせた対応をチームで継続していくためにもこれらの情報は文書化され、共通理解され、引き継ぎがなされなくてはならない。

2) 早期の対応

「様子をみましょう」という無責任な言葉によって多くの子どもたちの学校復帰が困難になってきている。連続欠席が続けば、対人関係は改善するどころか対人不安は増幅する結果となる。また学習機会も失われ学力低下の可能性を大きくし、体力低下や昼夜逆転による起立性調節障害などの身体的ダメージも大きくなる。不登校児童生徒の自室が携帯電話やパソコンによってインターネットで世界中と接続され、ネットゲームや投稿動画を自由に楽しめる状態にあることも少なくない。「自室で静かに自己と向き合う時間」というのは今や幻想になってきている。

1日目には確実に電話連絡をし、2日目には家庭を訪ね、3日連続すればチームを立ち上げて実態把握した情報に基づいて具体的な支援策を練ることが新たに不登校を出さない最善・最良の方法である。一般的に不登校は長期化すればするほど復帰が困難となり、本人にとっても多くの代償を払うことになりかねない。

3) 家庭との連携

「家庭が協力的でない」というのは学校が積極的対応を行わない理由にはならない。親とも本人とも連絡が取れず、かつ本人の所在も明らかでないケースをみかけるが、これを放置することは子どもが虐待や犯罪に巻き込まれている可能性を見逃すことになりかねない。子どもセンターや他の相談専門機関など学校外との連絡を取るべきである。学校と関係が悪化している場合においても子どもの状態や所在を日々確認することの重要性は親とも共通理解しておく必要がある。

また家庭訪問では、親や本人に登校を促すだけでは意味がない。家庭訪問時に実態把握のための情報を十分に聞き取っておかないとその後の支援は行き当たりばったりになってしまう。まずは保護者の話を聞くことによって親のニーズや性格を把握することができ、連携の基礎となる信頼関係も構築できる。

家庭訪問時の情報収集のポイントは以下の通りである。①子どもの体調などの確認から入る、②子どもの一日の生活の流れをイメージできるように聞き取る、③親や家族がどのように子どもに関与しているか、子どもの現状をどのように捉えているか、④親と意見や価値観の違いがあってもはじめから論戦しないこと、⑤本人と保護者とのコミュニケーションの様子として、しかるだけになっていないか、どの程度学校のことを話せるか、しんどいことを伝えられるか、テレビの話題などであれば話せるかなどである。具体的に確認できない部分はこちらから再質問して確認する。

4) 登校支援のための環境整備とスモールステップ

登校しやすい環境条件を整備することは、登校を促す場合の必要条件である。多くの子どもたちは、登校後にどこでだれと何をしてどれくらいの時間過ごすのかということに強い不安を抱く。また、早朝からの登校に対して体力的な問題を抱えている子どももいる。一人ひとりの子どもについて、登校しやすい時間、不安のない場所、負担のない好みの活動と時間を確保すれば、最初の一步は踏み出しやすくなる。

「甘やかせることになる」という考えによって環境整備がなされなければ、多くの不安を抱えた子どもたちは、登校のタイミングを失ってしまう。スモールステップで少しずつ子どもに自己決定させながら、約束しながら部分的な登校から進めていくことが重要であり、その時の子どもの努力を励まし、ほめて大いに認めていくことが大切である。

5) 連携と予防のために

不登校への取り組みは担任一人では限界がある。子どもの年齢があがるにつれ、友人関係は複雑になり本人から大人への直接的な相談も減少したり、限定的になりがちである。特に複数年度にわたって不登校状態が続いている場合は、前担任や家庭から情報を収集することが必要である。また中学では他の教科担任や部活顧問と連携しないと始まらない。家庭との連携の重要性は必須であるが、家庭と担任の連携がとれない場合には、すみやか

に校内の他の教師か外部機関を媒介していくことが必要である。

予防のためには、「わかる授業作り」を重視すること、昼休みなども常に教室に教師の目があるようにすること、本人や保護者とのコミュニケーションを日頃から心がけることが重要である。

3. 「ストップ不登校あかし」に積極的な理解と参加を

「ストップ不登校あかし」の取り組みでは、その一つとして「早期対応プログラム」を以下のような手続きで実施している。このシステムによって3日目までには、個々の児童生徒の実態把握ができあがり、具体策を不登校指導係にFAX送信することで、具体策に対するコメントや質問への回答、事例への提案がフィードバックされる。

実施した先生方のコメントでは「家庭訪問を繰り返し実施し、保護者との関係を強めることができ、登校につながっている」、「電話連絡をすることで、欠席理由が早く分かり、家庭訪問などの対応で登校できるようになった」、「毎日の家庭訪問を実施することで保健室登校、校門登校ができるようになってきた」、「連絡帳や電話で連絡を取り、数回放課後に学校に来ることができた」、「家庭訪問を続けることで、順調に登校できつつある」、「本人に目標を立てさせ実行したことを評価した結果、保健室登校ができるようになってきた」、「欠席1日目、2日目であっても電話連絡、家庭訪問を実施したところ、3日以上の連続欠席はなかった」、「別室登校の生徒が毎月の目標を決める中で、少しずつ登校日数を増やしたり、教室に戻る時間を増やすことができた」、「スモールステップとして、遅刻してでも登校するように指導したところ、登校できる日が増えた」などの声が聞かれている。

このような日々の早期対応を各学校で実施しているところもあるが、学校間にはまだまだ温度差があることも事実である。毎朝の欠席の状況を保健室の養護教諭と管理職が確実にチェックし、担任や不登校担当ときちんとした連携を取って早期対応を行うことが重要である。今こそ学校をあげての熱意ある対応を望みたい。

- 1 欠席1日目の対応 確実な電話連絡
- 2 欠席2日目の対応 病欠／明らかに病欠でない欠席にかかわらず家庭訪問を行う
- 3 欠席3日目の対応
 - 1 校内支援チーム結成
 - 2 マニュアル「児童生徒個々に応じた手立て」を参考に校内支援チームで対策を協議する。
 - 3 Faxを送信する。(様式1、様式2の計3枚)